

オーストリア「皇太子」の日本訪問（4a）

フランツ・フェルディナント訪日日記
 《1893（明治26）年8月2日～25日》（その4a）

渡辺 肇

倉敷芸術科学大学院人間文化研究科

（2007年10月10日 受理）

8月14日京都にて（承前）

この巨大な松の木から遠からぬところで我々は漁撈の目撃者となった。すなわち、湖の中に迷路の様に配置された水路が幾つかあった。築と繋がった竹の柵が、入り込んだ魚が最後には直径数メートルのかなり小さな場所¹⁸⁶に追い込まれてしまう様に、配置されていた。そこから逃れる術は無いのだ。我々の眼前で今度はこの様な場所の一つで魚が採取され、白日の下で何百キロもの魚が獲得された。取り分け、その中に、かなり大きな鯉もあった。当地での漁が非常に収穫を齎すは明らかだ。この湖は、他の総ての日本の内陸湖沼がそうである様に、非常に魚が豊富であるからだ。蒸気船達は少しの配慮も無く至る所で水面高く聳えている竹の柵にぶつかる。これらの柵が破壊され引裂かれると信じられる程だが何も起こらない。この弾力性がある材料は蒸気船の船首と船体の下に撓んでしまうが、蒸気船の船尾の後方で何事も無く起き上がるのだ。

大津に帰還した後で私は針葉樹で覆われた高台に通ずる石段の数多の踏板を登った。その高台の頂には仏教の聖殿、三井寺がある。この寺は既に7世紀に開基されたとされるが繰返し改築された。ここからはこの湖を見渡す展望と湖を取囲む風景が提供されるのだ。全く欧州風に建設された公共建築物は余り魅惑的な印象を与えない。その様な建物は厚かましく白色に塗装されて非常に自意識が強く、けばけばしいとは言わないまでも、周囲の光景からは浮出ている。

近代技術の傑作が大いに称賛されねばならぬ。それは運河¹⁸⁷であって、即ち、鴨川運河と鴨川自身と淀川を経由して日本の内海との連結を為すのである。1885（明治18）年から1890（明治23）年に施工された非常に重要な施設であって、京都西方で鴨川に合流する船舶の航行可能な11kmの長さの運河と灌漑用途に役立ち様々な産業企業の工場が必要とする水力電気をも供給する8kmの長さの第2運河¹⁸⁸からなっている。

この建設工事の困難さはまず湖と鴨川の間積重なる硬い岩盤の丘陵にあり、つぎに44メートルの標高差を克服する事にあった。しかしながら、第1の障害は三つの隧道によって、第2の障害は傾斜面の仕組¹⁸⁹を導入する事で、克服された。その仕組では第2運河で使用可能となった水力電気で動かされる強力なワイヤーケーブルを用いて船舶を上

下に滑り動かすのである。この運河施設の構想は田辺朔朗¹⁹⁰によって生み出された。彼は東京の工部大学校¹⁹¹で学んだ。余談ではあるが、彼は総ての計画や作図を左手だけで行ったのだ。私が景観に感服し運河の詳細を説明させていた際に、我々の周りの空中に色付きの風船が浮遊し色とりどりのリボンやテープが漂う様に見事な昼間の花火が打ち上げられた。

歩兵1個聯隊¹⁹²を収容する新築の清潔な兵営の上方の高台に将校集会所が位置していた。その位置と環境の良さ故にこの木造で和風にしつらえられた将校集会所は私が見て来た集会所の中で最も快適なものだ。壁面には薩摩蜂起³¹の戦場風景を示す写真や貴族達や将軍達や他の貴顕紳士達の記念の箴言と署名を記した沢山の献辞板¹⁹³が掲げられている。私は記念の箴言の幾つかを私の為に訳させた。それらは、特定の出来事に結び付いているか、第三者が知らない関係のもので、他の事もジョークを言っていて、例えば有栖川宮³⁵は「我々は百姓の乙女と歓談するだろう。」と言う風に書いていて、それゆえに完璧には理解出来なかった。我々がここで摂った昼食は、大きな氷塊を用いた冷房の御蔭で、また魅惑的な風景に直面して素晴らしくて、美味しかった。

大津からの発車は2時半となった。そしてまた、東海道鉄道で湖の東側を迂回し米原の周辺で岐阜に向かって東向きを変える。日本の歴史で忘れる事の出来ない重要である場所が本日の駐車場の一つの関が原なのである。そこでは1600(慶長5)年に75,000人の総大将家康¹⁹⁴が自分に反対して形成された連合の130,000人の軍勢に対して決定的な勝利を戦い取り徳川家に幕府を齎らしたのである。¹⁹⁵3時間走行した後に我々は岐阜に着いた。旅の途中で暑気と疲労に圧倒されて私は暫時の休憩を取りたいと思い、その目的の為に日本人に変装して、着物だけを身に着けたので汽車に乗込んでいる人々は爆笑した。

駅には天皇の指示で宮内省狩猟局長官の山口海軍大佐¹⁹⁶と1人の侍従¹⁹⁷が、2人とも緑色の礼装を着て私に挨拶をした。そして、何時もの様に華々しい街への入場となった。人々が大笑して押寄せて来ていて道路がぎっしりと埋っていたので人力車に乗った警察隊が我々の場所を確保する為に先に走行した。その際に好奇心で誘き寄せられた無邪気な見物人達が荒々しい遣り方でぶつかられ突き倒されたりした。しかしその犠牲者は、その平静さで私を感嘆させた。叱声の御返しをする事さえも無かったからだ。日本人はどのような人生の状況においても実に礼儀正しく留まっている。目立ったのは大勢の魅惑的な顔々々だ。その顔々々の中でも女性の住民達が私の入場に花を添えたのだ。

岐阜は同名の県庁所在地であり美濃の国の中心地だ。1891(明治24)年の地震¹⁹⁸とそれに続く大火事で完全に破壊され新たに建設されたので非常に清潔で粋な印象を与える。街の東方に横たわる丘陵の上にかの偉大なる信長¹²⁵が自分の治世に堅固な居城として相応しい地点を選び抜いたのだ。美濃の国は肥沃さと居住者の仕事熱心さに抜きん出ている。養蚕、絹織物、縮緬製造、製陶業、製紙業が目立つ。障子紙に特によく使われる美濃紙や、紙から作られた提灯、日傘や雨傘、懐紙が需要の多い品物なのである。ある倶楽部

ハウスで上述の品物の様々な製品が売りに出され、街の代表から私に献上された贈呈品も展示された。

我々が岐阜を訪れた目的は当地で名物のこの為^うに調教された鵜^うを使用しての漁撈¹⁹⁹を見てみる事だった。それだから直ぐに人力車に乗って岐阜の目^め抜き通りに沿って、長良川に掛かる美しい橋を渡って、右岸を上流へ、小さな庭に建つ綺麗な小さな家々や竹藪^{たけやぶ}の所を通り1時間程の道程^{みちのり}の街の北方で長良川の中に選択された漁場に向かった。既に目立っている数々の提灯で夜になれば大規模な照明が為されると予測させる。我々が乗船すべき場所に屋根付きで賑やかに飾付けられ照明された船が待機していた。その船に乗って我々が中流に達した後に先ず豪勢な夕食が振舞われた。漁撈は先ず暗闇が始まるのを待って初めて開始出来るからだ。日本の宮廷料理²⁰⁰は本当に特別の功績認知に値する。その料理は我々を飢餓によって死なせるのではなく、我々に対して常に魔法の食卓²⁰¹を^{ディッシュインデックディブル}支度してくれたからだ。

両側の川岸はここに遣^やって来た人々によってぎっしりと埋っていた。そして沢山の船が流れの波に揺れていた。それらの船には岐阜の名士たちや多数の記者たちが席を占めていた。記者達の幾人かはずっと我々に随行して来ている連中だ。この河はここでは30～40メートルの幅があり、強い流れを持ち、上流部では桂川と似て花崗岩塊による隘路は早瀬を為し、春の贈り物となる様な活動である大規模な河川氾濫地域で山岳河川としての特徴を特に露呈している。

夜が完全に暮れてしまったので、我々の船は、ロケット信号で6メートル程の12隻程の船がこの河の婉曲部の周りに現れるまで、更に数百メートル下流に流された。強烈な松明^{たいまつ}の篝火^{かがりび}が魚を誘き寄せ、各々の船^{へき}の舳^{へき}の上の鉄籠^{てつろう}の中で炎を上げている。そこには漁師が1人ずつ立って船の前方を泳ぐ8羽の鵜を保ち、両舷にはもう一人ずつの漁夫が2羽の鵜を導き、4人目の男が船を操る。私への説明によると、捕獲された若い鵜は従順になるまで調教される。即ち手で触れて食べる様になるまでだ。これで十分なのだ。その鵜は漁師が首の周りに強く巻^つ付けた紐^{なひ}で逃亡^{きま}を妨げられて水面に送られ、魚を捕り、嚙囊^{そのおう}²⁰²に収容すると言う遣り方で直ちに漁撈に用いられる。鳥がそうするのは本能に応じた欲望によってなのだ。けれども、魚が嚙囊から胃に達するのは、首の所で非常に狭く結ばれているので、妨げられるのだ。さて今や潜水した鵜はかなりの数の魚を苦勞して捕らえて嚙囊に入れていたのだが、そうすると鳥は船に引寄せられ、飼主に首の周りを押され獲物を強奪されるのだ。

ここでもそれが起こったのだ。炎の輝きが十分な数の魚達をひきつけてしまったときに、船団は動き始めた。同時に鵜を繋ぐ紐が緩められ獲物に飢えた鳥達は船腹を敲く音や大きな叫び声によって鼓舞され訳も分からず潜りながら血腥い狩を始めたのだ。独特の魅力を有する夜景が我々の前で展開した。我々に向かって接近してくる何隻もの船、それらの前には潜水したり浮上したりする鵜達、それらはあちこちで船上に揚^あげられ獲物を吐き出し

てからまた流れの中に消えて行く。漁師たちの興奮した叫び声や大騒ぎ、夜の闇を遠くまで照らす火のパチパチと立てる音、川を被う程の多数の船、炎の赤い光の中を岸辺で押合う人々。

これらの船が我々の所に近づいて、我々の船を真ん中に置き、更に流れを下り駆立てた際に、我々は鵜達の働きを最短距離から見る事が出来た。火は川底に至るまで水を照らす。絶えず鵜達に追われて魚の群れは吃驚^{びっくり}しあちこちに動く。2羽の勇敢な鵜が潜って同じ1匹の魚を追う時には特に活発な動きが水中で展開する。これらの2羽の鳥の1羽が勝者となるまで、真剣な争いが生じるからだ。遂には我々自身も興奮に巻き込まれ漁撈に対して非常に活発な関心を抱き始めたので、我々も叫びを上げて鵜達を駆立てたが、本来はそんな事をする必要は無かった。と言うのは勇敢な動物たちは漁の熱狂に襲われて、船上に揚げられるや否や直ちに再び真逆さまに水中に突進したからだ。山口海軍大佐は我々の関心に対し非常に喜んでいて。私がこの催しをもっと良く見られる様に立上った際に船が揺れ一杯のブラック・コーヒーをこの素晴らしい人の膝^{ひざ}に溢^{こぼ}した時も彼の喜びが減ずる事は無かった。

称賛を得るべきは自分達の職務を履行する漁師達によって証明された手際の良さである。その事で彼等は急流の中に船を操り、長い紐を用いて混乱させずにあらゆる方向に潜れる様に鵜達を操るのを掌握していたのだ。1時間弱の間で144羽の鵜達が3,000匹の魚を捕った。何匹かは非常に大きかったので潜った鳥達が格闘しなければこれらの魚を取り押さえる事は出来なかったのである。我々の目の前で1羽の鵜の嚙囊から16匹を下回らない魚が取出された。鳥の大きさからすれば全く釣合が取れない様な数である。

捕獲した魚はみんな鮭科^{さけか} 203 に属し、それらは非常に評価され、帝^{みかど}の好物料理なので、その食卓から欠ける事は許されないと言う事だ。船上の夕食で我々はこの種の魚を試食する事が出来た。我々はこの魚を美味しいとは思ったが、我々の鱒^{ます}ほどは素晴らしくはないと思った。本日捕獲された魚の水域は天皇のものだ。他の水域はこの街が私人に属する。正に御伽^{おとぎばなし}の様なこの川の富に対しても、また同様に他の水資源に対しても、魚たちに対する環境が以下のとおりである事がはっきりするのだ。つまり、我々が本日目撃した漁撈方法は、月夜で明るい夜を除いて5ヶ月間を通して毎晩行われ、毎回平均すれば5,000～10,000匹の魚の水揚げとなり、それらは直ちに氷詰めされて全国^{とこ}に送付されると言う事が、説明された。この様な漁撈方法では、鵜は無茶苦茶な魚の捕食者であって捕獲出来る限りの魚を見境もなく捕獲するのも拘らず、魚の存在量は常に繰返して補充されるのである。この様な事が可能になると言うのは、禁漁期^{きんい}の所為でもなければ漁業振興制度の所為でもないものであって、漁撈水域の汚染が工業施設によって我国に於ける程には生じていないと言う、日本の水資源の魚類に対する好都合な存在条件によってのみ説明されることが出来るのだ。

この川の兩岸の橋の近くは人々によって占拠されていた。我々を見る事が出来る様に水

中に胸まで浸かって駆けたりまでしていた。大勢で蜜蜂の群れの様に飛び回りぶんぶん音をだし、あっちこっちで朗らかな笑いが巻き上がった。活発な呼掛けが我々の耳に迫った。これらの総ての音が川の流れの音に溶合って妙なる調和もたらを齎した。

この提灯の街はその名声に引けを取らない様に見える。と言うのはこの街はどんな予想をも超越する程のイルミネーションを点じて我々との御別れをしたからだ。川岸や橋に沿っての何千もの赤い提灯。明るい赤色に光り輝く提灯の花綵はなづな²⁰⁴の様にかかれた大胆な弓なりのアーチが街路の上に掛かっていた。寺院の奇妙な形の屋根や家屋の前面に沿って流れる点灯された白色の提灯によって形成された線。街路の到る所に横断照明がとも灯っていた。あらゆる方向から紅白に照らされ光輝くので市街地から駅までは暗い夜空の下で光が際立っていた。

市長の先導で大勢の人々が続く人力車の隊列は駅に向かって動き始めた。駅では市長が岐阜訪問に対して謝意を述べた。私から御返しの言葉を述べた後、列車は我々を乗せて東海道線で名古屋に向かい南東方向に走った。名古屋では桂師団長²⁰⁵が私を出迎えた。流暢なドイツ語を話し、中でも、4年間をウィーンで過ごしその滞在を暖かい思い出として憶おぼえていると、告げた。街に入って行く際に花火が、今回はこの様な夜に打上げられ、私が見た中で最も美しいものであったと看み做なされなければならぬ。夜更けにも拘らず我々が宿泊する予定のホテル²⁰⁶の前には名古屋の住民たちが非常に多く遣って来ていて、偶然私がヴェランダに現れると、あたかも私がオペラのプリマドンナであるかの如く活発に拍手喝采はくしゅかつさいした。それに対し私は感謝して御辞儀をしたのであった。

8月15日名古屋から国府津へ

名古屋は一夜を過ごすだけの宿泊地だと見なしていたのだが、駅に向かう際に回り道をした。お城をちょっと見物し、一般的な概略でしかないとは言え都市の印象を頭に残す為だ。この都市は庄内川の右岸の尾張湾²⁰⁷から遠くない所に位置しており、繁栄している地方都市である事が直ぐ分かったし、家康の息子の1人によって創設された家系である尾張侯²⁰⁸の嘗ての本拠地であった。

179,000人の人口を擁する名古屋はこの国の第4の都市であり愛知県の県庁所在地であると共に東海道地方に属する尾張の国の中心地でもある。東海道とは東の海の街道と言う意味であって、東京と京都を結ぶ有名な街道である。この都市は平野に位置しているので景観的に美しい周辺部は有しないが、それ自体で少なからず魅力ある印象を与える。到る所にきちんと設しつらえられた無数の店舗に、この都市の住民の勤勉な仕事熱心さが現れているのだ。ここの城塞じょうさい、つまりお城、は1610(慶長15)年に家康の息子の居城として建設された。施設は熊本や大阪の堅固な城塞を思い出させる。建物内部は芸術的な設しつらえであるにも拘らず、日本に於ける事態の急激な変革³⁴の後には軍部に委ねられ、その後は宮内省を通して適切な保護が行われている。外堀と内堀の間の空間は、尾張侯の侍達の居住地

域であったが、現在は兵營と練兵場になっている。5層の高さの天守閣の先端には、天守閣を築いた有名な武将である加藤清正が費用を負担して1610（慶長15）年に製作させた、462,800グルデン⁴⁵の値打がある2匹の2.6メートルの高さの金の海豚²⁰⁹が街の遠くにまで輝いている。これらの海豚の一つは不思議にも驚いた事にウィーンと関係を有する運命があったのだ。この海豚はウィーン万国博覧会²¹⁰に送られたのであるが、帰路に於いて蒸気船「ナイル号」が沈没したで、多大なる困難を克服し再び引揚げられ以前の場所に取り付けられたのだ。

名古屋から鉄路は、まず浜松までは大きく弧を描いて南東に向かい、それから静岡を経由して岩淵²¹¹まで北東に湾曲し、そこからは沼津に到るまで東方に走っている。走路は大体に於いて太平洋岸に沿って東海道が示す方向に伸びている。東海道は以前の交通の要路で頻りに鉄路に接近して来るが、その両側に高い幹の杉や檜の木々が並んでいる。全路線に於いて鉄路は、大小の川の流れや汽水²¹² 湿原や干潟や入り江を横切って見事に掛けられた無数の橋梁を渡る。舞阪駅の直前で湖、いや正確に言えば浜名湾²¹³ 呼ぶべきであろうが、の上に伸びる無限にも思える程の鉄橋と堤防の組合せを我々は通過する。その直後に天龍川に掛かる見事な橋梁を超えるのだが、これは日本では模範的な建造物と看做されている。

この走路の前半では竹林の他には果てなく米の栽培を見せ、所々には庭園によく似た地方の特質を見せるが、風光明媚な景色を呈する事は無い。鉄路が海岸に接近すると海への眺望が開け風景は鮮やかな彩色写真の様になる。後で景色は一変する。と言うのは、丘陵の連なりが陸地の内部から更にこちらにまで、まるで鉄路を超えてどんどん海に押し掛ける程に、続いているからだ。間もなく我々は日本の高山地帯に踏み入る。それから鉄路²¹⁴ は広大な富士山の裾野を通して箱根連山を迂回する。

日本の象徴であってヨーロッパでは大抵フジヤマと呼ばれる富士山あるいは富士の山を知らない者があろうか？それは漆器や陶磁器や紙や木や金属を使用した日本美術の最も好まれる題材の一つとして我々に立向かって来るのであるから。毎年何千人もの巡礼者が訪れる聖地として1706（宝永3）年²¹⁵ 以来は平穏を保っている古い火山の富士は日本最高峰として聳え立ち3,760メートル²¹⁶ の標高を有して幅広い底辺で円錐形に孤立してそそり立っている。残念ながら我々に対して何百もの絵画から良く知られた山の現物の頂上は他の高地と同じく薄い霧のヴェールで覆われている。兎も角も効果十分の対比が形成されている。左手には連山を仰ぎ見て、右手には太平洋から打ち寄せて碎ける波、そして遠くには涼しい微風で帆を膨らませた無数の船を散らばせた海を見晴らすのだから。

箱根連山が、関門の東と言う意味の関東、即ち帝国の首都を擁する低地²¹⁷、への入域を防壁の様に遮断しており、そこで東海道は箱根峠や他の一連の山越えを通過するのである。この箱根峠には徳川統治の時代に大きな関（門）、つまり、低地²¹⁷ への立入の警備に従事するいわゆる見張所があったのだ。到る所に緩な谷間や深く切込まれた溪谷が開け

て、そこには大小の河川が音を立てて流れ出ていた。富士を含むあれらの立派な山々は我々に対して高峰と言う印象を与えない。大地は丸みを帯びた優しい形だからだ。我々にとって高峰と言うものは聳え立ち峻巖に下ってきて岩尾根があり裂目がある岩石の構築物と言う観念と結び付いているのだから。

残念ながら車窓を流れて変り行く景色を楽しむ事が、燃料として使用されている劣悪な石炭の影響によって、酷く乱された。その煤煙が総てを覆い隠してしまうからだ。だから他の観点からしてもヨーロッパ的な遣り方で旅人の快適さが守られる様に気を配る事はまだ為されていないと言う事だ。

人気のある温泉地である国府津で我々は汽車を降りた。東京での公的な御祭騒ぎの渦に巻き込まれる前に温泉が豊富な箱根連山に所在する宮ノ下²¹⁸に赴く為だ。我々が軌道²¹⁹で宮ノ下まで走行する前に、波が砕ける海辺への眺望を有する一軒の茶屋が暫時我々を客として持成した。その軌道は東海道を西の方角に向かい酒匂川と次にもう一つの小川を横切って我々を小田原に齎した。小田原は相模の国の中心地で嘗て著名な北條家が本拠地としていたが、北條家は1590(天正18)年に強大な太閤様⁷³により滅ぼされた。小田原城址の所で馬が換えられた。他の場所でも同様に家々から人々が走り出て来て我々を珍しげに観察していた。我々の服装がかなり奇妙であったからだろう。私の車両を操る馭者は燕尾服を着用し白い蝶ネクタイを付け高いシルクハットを被って任務を遂行していたからだ。その役割の重要性を思う気持が一杯のあまり、あらゆる瞬間にブレーキを引くので、隣れな馬は泡を吐き喘ぎながら前方に進んだ。しかし例の宮内省主猟局属官^{13b}は突撃帽と剣を佩いた礼装に身を固め車両の後方で車掌の役割を果たした。

我々は早川を渡ってから間もなく湯本²¹⁸に到達した。そこで軌道²¹⁹からそれぞれ3人の車夫が曳き人力車に乗換えた。直ぐに宮ノ下に向い動き始めた。音を立てて流れる小川の曲りくねった溪谷に密着して延びる山道を辿った。効目に優れた硫黄泉で有名な湯本は山並の斜面に立てられた沢山の可愛い家々を有する避暑地であり、夏には涼しくて快適な滞在を提供できるのだ。

我々の小道は河岸の右側を蛇行して険しく上方に延びる。その間我々の遙か下方で殆んど木々に隠れて早川が勢い良く流れる。実直な車夫達が曳き上がって行く斜面には木々が繁茂している。他方の反対側の、我々が故郷での言うところの日当りの良い方には木々は生えてなくて、背の高い草で被われている。そこは明らかに養生されずに停滞していて再度植林する事は配慮されていない。泉が岩から湧出しているところでは常に、1軒の小さな茶屋が徒歩旅行者を持成す準備をしていて、朗らかに見える娘達が疲れた人に疲れの回復の為に御茶を差出しているので、風景は快い事に活気を帯びて来るのだ。

塔ノ沢²¹⁸の辺りで道程の概ね最初の三分の一程に達した。その際に熱い温泉の場所に向い合っている丘の上に建てられた1軒の白い建物から目が離せなくなった。その建物は長く日本で暮らしたあるロシアの女伯爵によって設立されたギリシャ正教²²⁰の礼拝堂で

あった。しかしその宗派の宣教活動はなんら特別の成果を享受する事が無かったのだ。

我々が夜の7時ごろ宮ノ下に到着するまでに既に400メートル以上は上昇していた。当地は温泉と清浄な空気と快適な散歩道の所為で非常に評判が良い温泉場であるが、私が見渡した限りでは、実際のところ旅館とそれらに付属する家屋ならびに若干の商店があるだけだった。私の期待は事前の説明で非常に強く膨らんでいたもので、かなり失望したのであった。この地域では、魅惑的な風景の魅力を提供する様な、或は、特徴のある山脈の形で特に優れていると言う様な、事が求められて居る訳では無いのだ。

その聚落自体、少なくとも我々が宿泊した大きなホテル²²¹に関しては、完全にヨーロッパ的に設えられていてイギリス人やアメリカ人を歓迎する様になっているのであって、女性従業員による接客²²²のみが日本を思い出させるが、それが無ければ自分がスイスの施設にいるかの如くに、立派なものだと自分には信じられるのだ。私は風景と聚落が日本独特のもの、つまり、日本風の山小屋を有する高峰、そして、私の脳裏に浮かぶ宮島での忘れ難き思い出の様な快い静寂さ、を見出せる様にと言う願いを持ってここに来たのだ。それなのに朝食、昼食、夕食の報せに銅鑼の響きが鳴響き、英語の音が飛交う世界のどの国に出しても先端に行く様なホテルを見出したのだ。それに反して、御辞儀を交わし合う貴顕紳士達が完全に欠如して、生気を取戻させる新鮮な山の空気が支配していた。

私は遠くまで伸びている山峡をなお暫らくぶらぶらと歩いてみた。その際に動物相、つまり、この地域の野生動物を見たかったし、少なくとも鳥達が囀っているのを聴きたかったからなのだが、無駄骨に終わった。普通の鳥だけが頻繁に見られた。鳥属に対しては完全な絶滅を誓うべきであったろう。と言うのは、この鳥の1羽が宮城の庭園を逍遥していた帝に対しふてぶてしく振舞ったので、畏怖と礼儀作法を全く欠いたこの動物は追放令に処せられたからだ。狩猟対象として面白い肉食獣類とか鹿類とか羚羊類が実際に日本に特有な動物であるから、それらの動物や同様に到る所に現れる雉の、狩猟をするのが私には望ましいのであったのだろうが²²³、今は禁漁期でもあるし、狩猟に専念する為には旅行日程を配慮すると不可能でもあったろうから、獵銃を日本では休息させて置かなければならなかった。

万病に対して効果があるとされる硫黄泉はこの大規模な日本的施設に導かれている。

8月16日宮ノ下にて

この日は完全な甘美なる無為²²⁴に捧げられた完全休息であった。見物すべき寺院も無ければ天気が悪くハイキングをする事も無かったからだ。午前商店訪問に充てた。私は様々な種類の実際には役に立たないガラクタを多量に買求めた。また金魚に餌をやったり、ある日本女性の技巧を凝らした髪形がどの様にして出来上がるのかを見物したりした。その女性は部屋着姿であったのに我々が手伝うのを悪く取ったりはしなかった。それから我々全員が着物を着て、その衣装で写真を撮らせた。その際に特に大いに肥満している我

らが侍医長に対し沢山の若いアメリカ女性達が爆笑した。この撮影の中で特に滑稽なものとなったのは随行員全員が私に対して日本的な遣り方で平伏しているものであった。今や我々は既にこの国の風習を楽しんだので、私は自分に刺青を入れさせた。²²⁵ 52,000 針以上を要してかなりの痛みを伴う手順の後に、私の左腕に颯爽とした竜が現れ出たのだ。この戯れによって私は恐らく消す事の出来ぬ痕跡を後悔する事になるのだろう。このあまり有意義ではなかったが休息十分に過ごしたこの日を散歩と美味しい夕食で締め括った。

8月17日、宮ノ下から東京を経て横浜へ

殆んど止まなかった激しい雨の中で我々は朝の5時にもう宮ノ下を去らねばならなかった。我々が来たのと同じ道程を燕尾服着用と同じ馭者によってだ。7時に出発し我々を横浜まで移動させる汽車に間に合う様に国府津に到着する為だ。横浜で公使のビーゲレーベン男爵、クーデンホーフ¹⁷⁹とクライター総領事²²⁶、ベッカー艦長⁴⁰⁵が列車に乗ってきた。駅から見えたのは、家々のかなたの港の《エリーザベト号》だ。他の総ての艦船と比べてどっしりとして、しかも優雅な船型が抜きん出ている。私を喜ばせてくれる眺めだ。

横浜から東京への走行中に私は正装²²⁷に着替えねばならなかったのだが、余り広いとは言えない車両の中では困難であって煤煙のため白い上着が汚染される危険があった。しかし、その仕事は40分の走行時間内で旨く行った。私を少なからず上機嫌にさせたのだが、窓から眺めて私に分かったのは日本政府が私の安全を心配して出来る限りを尽くし海にまで警察を配備させた事である。鉄路が海岸の直ぐ傍に近づくると路線に沿って数百メートル毎に乗船して配備された警備員達が列車の通過するに際し敬礼するのに私が気付いたからである。東京到着²²⁸に際しては7センチ砲の山砲兵1個中隊²²⁹が芝生の上で礼砲を発射した。

新橋駅は完全に閉鎖されていて公務上の重要人物達のみが見られたのであるが、天皇の指示により帝の叔父^{みかど} ^{35a}であり、私が日記で触れた大津の将校集会所にあった箴言の執筆者である、有栖川宮^{ありすがわのみや} ³⁵が挨拶²³⁰した。宮は既に1868(慶応4、明治元)年の内戦^{34a}にと1877(明治10)年の薩摩蜂起³¹に於いて官軍の最高指揮官として勝利に導いたのであり、現在は陸軍の最高指揮官²³¹である。また大臣と宮廷の高官達の全員が出迎えに姿を見せた。我々の公使の妹であるビーゲレーベン男爵令嬢とクライター夫人がオーストリア・ハンガリー居留民を代表して薫高い花束を私に手渡した。双方の随伴員と最高位の貴顕達が通常の通り紹介された後、儀仗中隊²³²が日本の將軍行進曲²³³の響きの下に捧げ銃^{つつ}を行った。私は宮と共に宮廷の儀装馬車に乗って近衛槍騎兵1個中隊²³⁴に護衛され、諸部隊の隊列²³⁵が道の両側に整列する中を御浜御殿離宮^{おはまごてん} ²³⁶へ向かった。離宮は市街地からはかなり離れていて海浜に位置する。

我々が離宮に向かって走行した際に東京が与えた最初の印象はそんなに感じが良いものではなかった。見えるのは余り清潔でない小さな家々、長く続いている運河、工場、殺風

景な塀の表面、だけだったからだ。我々が投宿する宿舎には、同様に儀仗中隊が行進して来ており捧げ銃をして演奏を行っていたのである。離宮と言うのにはおこがましく、小さな邸宅と言うのが良いところであるが、ヨーロッパ風の様式で建築されており、内部の調度品に関しては西洋の快適さと日本的な快適さを折衷させようとしているとの印象を与える。しかし、その際に私が強調せねばならぬ事はその国を由来とする物は趣味よく施工されてこそ好影響を及ぼすと言う事である。

有栖川宮が別れを告げると直ぐに私は宮のところに答礼訪問し、更に、近衛師団長で、同様に帝の叔父である小松宮彰仁親王²³⁷と天皇の養弟で騎兵中隊長である関院宮載仁²³⁸親王を訪ね名刺を置いてきた。

私がこれらの訪問から戻る途中に東京の心臓部を通った。その状況からして私にはかなりの距離と思えた。私は親王達と家では会わなかったにもかかわらず2時間を必要としたからだ。その事がこの街の概観を知悉する可能性を与えた。東京あるいはこの街が嘗て称した江戸は、15世紀の半ばに孤立した村々に周りを囲まれ小さな城塞が建造された場所に、生成したのだ。その城塞は1524（大永4）年に小田原に居住する北條氏綱の所有となった。この北條氏の支配が滅亡し、家康が北條氏に属していた関八州に封ぜられた後の1598年²³⁹に江戸を居城と定めた。江戸は急速に成長し繁栄した。というのはこの国の諸侯全員が当地に宮殿を建築し1年のうちの1部分をそこで過す事を義務付けられたからだ。江戸の光り輝く時代は徳川家出身の將軍達の誰彼と緊密に結び付いていた。將軍の居城は幕府の廃絶に到るまでこの街に留まった。江戸は新しい時代に入り、帝が当地に本拠地を定めた1869（明治2）年には、東の都^{みやこ}という意味の東京という名前を貰ったのだ。

この都市は約260km²の広さで底の浅い江戸湾の北方で隅田川の東西に広がっている。東京は隅田川の右岸で北と西に向かって約30mの高さの平坦な丘陵に向かってせり上がっている。住民数は1,628,000人と報告されている。但しその人口は都市化された領域全体、すなわち大東京ともいうべき東京府²⁴⁰のものである。この都市は15区に区画され、公共機関の中心を形成し、最遠部で江戸湾と隅田川に達する御城の濠と城壁の内側に位置している。この城は防御施設、環状の城壁、濠により防衛されていたが、内戦の後で灰燼に帰した²⁴¹、將軍達の古い城であったのだ。

（紙幅制限のため続きは次号）

註

186 漁撈用語で築簾と呼ぶ。

187 琵琶湖疎水

188 第2疎水

189 京都市賦上にあつたインクライン：傾斜面にレールを敷き、動力によって台車を走らせ、貨物や船を昇降させる一種のケーブルカー

190 1861（文久元）年～1944（昭和19）年、江戸生れの土木技術者、京都帝国大学工科大学長（現在の京

都大学工学部長)等を勤めた。

- 191 現在の東京大学工学部
- 192 歩兵第9聯隊、後に1925(大正14)年の軍縮で聯隊本部と第1、第2大隊は京都に移転、第3大隊のみ残留する。
- 193 色紙か?
- 194 徳川家康
- 195 この文章では関が原の合戦の後、直ぐに徳川家康が征夷大將軍に任じられたかの様に読めるが、実際には3年後の1603(慶長8)年である。
- 196 海軍大佐山口正定、この5年前の1888(明治21)年4月20日、宮内省に主猟局が設置され、その長官に補された。勅任2等上級俸下賜。
- 197 侍従で主猟官を兼任していた陸軍歩兵中佐米田虎雄と思われる。勅任2等下級俸下賜。
- 198 ウィーンの民俗学博物館にはフランツ・フェルディナントが日本から持帰った美濃大震災の写真帖が保存されている。
- 199 鵜飼
- 200 明治天皇から差遣された随伴員の中には宮内省大膳職山内勝明等が派遣されていた。
- 201 グリム童話で願いどおりに次々と好みの飲食物が出てくる魔法の食卓。
- 202 鯛袋まぐろぶくろ
- 203 鯛は鯛科ではなく鮭科に属する。
- 204 花を編んで作った綱、西洋で祭りの装飾等に用いる。
- 205 桂太郎、1847(弘化4)年~1913(大正2)年、当時、陸軍中將、第3師団長、1898年に陸軍大臣(1月)、陸軍大将(9月)、日露戦争時は内閣総理大臣(1901年より)、その後、更に内閣総理大臣、内大臣兼侍從長を歴任、公爵(1911年)、元勳となる(1913年)。
- 206 秋琴しゅうきんろう楼
- 207 伊勢湾
- 208 尾張徳川家、また尾州家とも言い、徳川家康の第9子義直を祖とする、徳川御三家の一つ。
- 209 金の鯛、雌は8尺3寸(251メートル)、雄は8尺5寸(257メートル)の高さ。
- 210 1873(明治6)年5月1日から11月2日まで開催。
- 211 1970(昭和45)年6月1日に富士川と改称。
- 212 海水と淡水の混合によって生じた低塩分の海水。
- 213 普通は浜名湖と呼び浜名湾とは呼ばないが、浜名湖は遠州灘に通じている汽水湖なので浜名湾と呼んだのであろう。
- 214 熱海あたま・函南かんなん間の丹那トンネル(全長7,840メートル)が1934(昭和9)年に完成するまで東海道線は現在の御殿場線(国府津から沼津までの60.2キロメートル)を經由していたので、フランツ・フェルディナントはその区間を走行した。
- 215 1707(宝永4)年の間違い。
- 206 3,776メートルの間違い。
- 217 関東平野
- 218 箱根温泉郷にある箱根七湯の一つ。
- 219 ここでは馬車「鉄道」。法律用語で軌道と言うのは一般道路の上に伸びる鉄路。人や馬や蒸気や電力を動力とする。それに対して鉄道は専用の鉄路を使用する。
- 220 ギリシャ正教とあるが、正確に言えば、ロシア正教であろう。
- 221 1878(明治11)年に箱根宮ノ下の開業された富士屋ホテル。
- 222 欧米の超一流のレストランでは現在でも普通は男性が給仕する。
- 223 フランツ・フェルディナントは熱心な狩猟家で生涯に無数の野獸を屠ほった。この世界旅行の際にもインドでは虎狩をした。また、後年サラエヴォで暗殺されたのはチロルで神の使いとされる白鹿を屠った事の祟りであったとの説もある。

- 224 イタリア語でdolce far niente。
- 225 西洋の貴人が日本を訪問した際に刺青を入れるのは珍しい事ではなかった。例えば後年1922（大正11）年英国皇太子（後のエドワード8世、シンプソン夫人との王冠を懸けた恋の後に退位、ウィンザー公となる）も来日の際に刺青を入れている。
- 226 オーストリア・ハンガリー横浜総領事
- 227 オーストリア陸軍将官の正装で、上着は白色、ズボンは赤色。
- 228 フランツ・フェルディナントが到着したのは新橋駅である。1914（大正3）年に東京駅が完成した際に新橋駅は烏森駅に移り、元の新橋駅は汐留貨物駅となった。その駅舎は1923（大正13）年の関東大震災で消失したが、汐留貨物駅の廃止とその再開発に際し旧駅舎は原型の通りに再建された。（但し煉瓦造りではなく鉄筋コンクリート造りで。）
- 229 実際には第1師団野戦砲兵第1聯隊。
- 35a フランツ・フェルディナントが有栖川宮を明治天皇の叔父と書いているのは、有栖川宮は北白川宮能久親王と同様に明治天皇の祖父である仁孝天皇の猶子（養子）であり、明治天皇の父である孝明天皇の義理の兄弟に当たるからである。
- 230 この出迎の光景を描いた国正の浮世絵がアートシュッテン城のフランツ・フェルディナント博物館に展示されている。この絵は種々の書籍の中で用いられている。しかし、着用している正装の上着は白色ではなく赤色である。オーストリア駐劄日本大使を務めた故小野寺龍二氏との食事の際にその事が話題となった。小野寺氏によればこの浮世絵はフランツ・フェルディナント訪日の2年前（1891年）に大津事件の犠牲となり訪日日程を途中で切上げ帰国したロシア皇太子ニコライの新橋駅到着を予定して描かれたものを殆んど変更せず使用したから誤謬が生じたとの事である。
- 34a 明治維新に伴った戊辰戦争
- 231 この表現は正しくない。陸軍の最高指揮官は明治天皇であり、有栖川宮は参謀総長として陸軍での天皇への最高スタッフであり、ラインには入っていない。
- 232 第1師団歩兵第1聯隊
- 233 将官喇叭と通称される喇叭譜「海行かば」。部隊が将官に敬礼する際、大将には3回、中將には2回、少將には1回吹奏される。
- 234 実際には近衛師団近衛騎兵大隊の1個中隊。日本の騎兵は槍騎兵とか龍騎兵とかに区分されていなかったが、鹵簿の際には騎兵槍を立てて騎乗したので、フランツ・フェルディナントは槍騎兵と記したのであろう。
- 235 近衛師団の歩騎砲工輜の部隊と第1師団の歩兵第1聯隊。
- 236 現在の旧芝離宮恩賜庭園に所在した宮殿。幕末には紀州家の浜屋敷。1876（明治9）年に離宮となり外国貴賓の接待所とした。1923（大正12）年の関東大震災で消失。翌年離宮跡は東京市に下賜された。現在は都心の一角であるが、フランツ・フェルディナント訪日時には都心とは離れていた。
- 237 1846（弘化3）年～1903（明治36）年、閑院宮弧載仁親王の兄、当時陸軍大将、近衛師団長、1895（明治28）参謀総長、1898年元帥、騎乗の銅像が東京上野公園にある。
- 238 1865（慶応元）年～1945（昭和20）年、当時陸軍騎兵大尉で第1師団騎兵第1大隊中隊長、後に元帥陸軍大将、1931（昭和6）年より1940（昭和15）年まで参謀総長。閑院宮家は四親王家の一つ。
- 239 1590（天正18）年の間違い。
- 240 1893（明治26）年初頭の東京府は島嶼を除けば東京市と周辺部6郡からなっていたが、4月に神奈川県より西・南・北の多摩3郡が移管されたので純粋な田園地帯を含み都市部だけではなくなっていた。東京市は15区からなっていたが、1932（昭和7）年には周辺部を合併し20区を加え35区となった。1943（昭和18）年東京府は東京市と合併し東京都となる。1947（昭和22）年3月戦災により人口が減少した都心区を中心に廃置分合し22区としたが、同年8月人口増の著しかった板橋区を分割し練馬区を設置23区となり現在に到る。
- 241 江戸城は西郷隆盛と勝海舟の交渉で無血開城されたので灰燼に帰したのではない。

Erzherzog Franz Ferdinands Japan-Besuch 1893 (Teil 4a)

Hajimu WATANABE

Graduate School of Science and the Humanities

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 10, 2007)

Am 14. August fuhr Erzherzog Franz Ferdinand von Kioto mit dem Zug nach Nagoja. Unterwegs besuchte er zuerst Otsu, um eine kleine Rundfahrt auf einem Dampfer über den Biwa-See zu machen. Er hatte das Mittagessen in dem Offizierskasino des Infanterieregiments in Otsu. Weiter fuhr er über Maibara und Sekigahara bis nach Gifu, so daß er den dort üblichen Fischfang durch hiezu angerichtete Kormorane kennenlernen konnte. Im Auftrag des Kaisers Meidji spielte Kapitän Jamagutschi, der Direktor des kaiserlichen Jagdamtes, die Rolle des Gastgebers. Spät abends fuhr er weiter nach Nagoja, wo ihn Generalleutnant Taro Katsura, damaliger Kommandant der 3. Division, späterer Ministerpräsident, Kriegsminister, Generaloberst und Prinz, in fließendem Deutsch, begrüßte. Die Bewohner Nagojas hießen den Erzherzog willkommen. Er übernachtete dort.

Am 15. August besichtigte er die Burg und die Stadt von Nagoja ganz kurz. Er fuhr weiter nach Osten und genoss die Landschaft unterwegs. Er kam in Kosu an und stieg dort in die Pferdebahn nach Odawara um. Nach der Ankunft in Odawara nahm er den Dschinrickscha und fuhr weiter nach Mijanoschita, wo sich sein Hotel Fujija befand.

Am 16. August hatte er einen ganzen Ruhetag, er ließ sich in der japanischen Tracht photographieren und unterzog sich der Tätowierung eines Drachen auf seinem linken Arm.

Am 17. August verließ er Mijanoschita um 5 Uhr früh und stieg um 7 Uhr in Kosu in den Zug. Er fuhr über Jokohama nach Tokio. Dort kam er am Bahnhof Schimbashi an, wo ihn Prinz Arisugawa, damaliger Generalstabschef und anlässlich der japanischen Bürgerkriege 1868 und 1877 Oberbefehlshaber, im Auftrag des Kaisers begrüßte. Während eine Ehrenkompagnie unter der Klängen des japanischen Generalmarsches präsentierte, bestieg er mit dem Prinzen zusammen einen Hofgalawagen und fuhr, von einer Eskadron Garde-Lancier eskortiert, durch ein Spalier von Truppen zum kaiserlichen Lustschloss O-hama-goten. Nachdem Prinz Arisugawa sich verabschiedet hatte, erwiderte er den Besuch des Prinzen und ließ seine Karte auch bei den kaiserlichen Prinzen Komatsu Akihito und Kan-in Kotohito.